

学部留学生の日本語力に関する報告 —中級者に対する試みと提案—

小川 蒼子美・丸山 千歌・奥野 由紀子

【キーワード】 学部入学前予備教育、日本語力レベル判定テスト、中級者、日本語学習指導、早期対策

0. はじめに

2003年度、本センターの日本語教育部門は、留学生センターの日本語教育担当者が経験的に感じている学部留学生の日本語力の多様性と、日本留学試験受験を経て本学に入学する学部留学生の日本語力とに対応した留学生センターの日本語教育カリキュラムを構築することを目指し、その第一段階として学部留学生の日本語力の実態を把握するための調査を行った。具体的には、前期開始時に学部留学生を対象にレベル判定テストを実施し、本学の学部留学生の入学時の日本語力を観察した。また、中級者と判定された者については、日本語学習指導を設け、必要に応じて日本語履修についての助言を行った。

本稿は、この試みについて報告するとともに、試みの中から見えてきた問題点を整理し、学部教育の質を維持するための早期対策として、主として履修規定を中心に、今後必要と思われる検討事項を提案する。

1. 試みの背景

今回の試みには、学部留学生の入学時の日本語力が多様である、また日本留学試験後の入学者の日本語力の質の変化に早期に対策を講じる必要性があるという背景がある。以下、これについて説明する。

1.1 学部留学生の入学時の日本語力の多様性

まず、学部留学生の入学時の日本語力の多様性について説明する。本学の学部留学生は2003年度5月現在212名で、本学に在籍する留学生の24.9%を占めている⁽¹⁾。学部留学生は大きく2種類に分けられる。(1) 日本語能力試験(2003年度入学者からは日本留学試験)を受験し本学に入学する学部留学生、

いわゆる私費留学生と、(2) 文部科学省または自国の政府奨学金を受け、学部入学前に日本語予備教育を受けた留学生である。

後者は日本語予備教育を受けた機関が国内（学部国費留学生）と、自国（国費以外政府派遣留学生）とに分けられるが、両者とも日本語予備教育を受けて入学する、また入学の条件に日本語能力試験において一定の水準を達成していることが課せられていない、の2点において共通する。また、(1) が中国、韓国などの漢字圏からの留学生が大多数であるのに対し、(2) は非漢字圏からの留学生が73.3%を占めることは、日本語力について論じる場合の(2)の特徴として特記すべき事項である。

本センターでは、(1) と (2)、つまりすべての学部留学生を対象に教養教育の中の外国語科目として日本語I、日本語IIを年間合計12科目（1科目週1回、1コマ90分）開講している⁽²⁾。これらは日本語能力試験1級合格を目安として日本語のレベルを設定されてきたが、授業担当者からは(1)と(2)との日本語力に顕著な差があること、(2)に対する日本語面での特別な配慮がないと単位取得が困難であることが以前から指摘されてきた。

この(1)と(2)の日本語力の差に対する対応は、これまでも試みられている。例えば、2000年度および2001年度には、(2)の学習者を対象とする日本語Iを2科目新設する工夫がなされた。しかし、時間割上の理由から、受講すべき日本語レベルの留学生が受講できないケースがあるなど、カリキュラム面での課題が生じた。適切な学習カリキュラムを提供するために、日本語力の差がどの程度のものを改めて測ることが必要となった。

1.2 日本留学試験受験を経た入学者への対応

2003年度は日本留学試験を受験して入学した留学生を受け入れる初めての年であった。日本国際交流協会がホームページ（2003）で「日本語能力試験は、一般的な日本語能力を測定する試験で、文字・語彙・文法等の言語知識を重視しています。これに対し、日本留学試験の日本語科目は、日本の大学等での勉強に対応できる日本語力（アカデミック・ジャパニーズ）の測定を目的としていて、言語知識よりはスキルを重視しています。」と明記しているように、日本語能力試験と日本留学試験では、試験の目的が異なる。

日本語力の点では、日本留学試験では、200点以上得点した者は「日本語能力試験2級合格⁽³⁾の者と同等以上の水準に達しているものとして認め」ら

れ、「留学生として日本に入国・在留するための申請の際には、日本留学試験の成績通知書（日本語（読解、聴解及び聴読解の合計）200点以上の証明書）の写しを提出すれば、よい」ことになる（日本国際教育協会、2003）。しかし、何点を取れば1級レベルと見なすことができるかは、現時点では明示されていない。

上述のような試験の目的の違いから、日本留学試験の内容は、当然日本語能力試験と異なる。今後の学部留学生予備軍に対する日本語教育は、日本留学試験受験を目指す傾向が強まると思われる。そこから波及する大学への影響は、これまで教養教育が前提としてきた学部留学生の日本語力とは異なる特徴を持つ留学生が多数入学してくる可能性が高くなるということである。教養教育科目の日本語科目はこのような変化に対し、迅速に、かつ適切に対応していく必要がある。

以上の2点から、日本語教育部門は、2003年度、学部留学生1年生を主な対象とする日本語Iを受講する学部留学生を対象にレベル判定テストを実施し、一部の留学生については口頭運用力を測るインタビューと日本語学習指導を行うこととした。

2. 本年度(2003年度)の試み—入学時の学部留学生の日本語力と学習計画—

前節で述べたように、2003年度は学部留学生に対するレベル判定テストと日本語力に関するアンケートの実施、その後、一部の学部留学生に対し、口頭運用力を測るインタビューと日本語学習指導を行った⁽⁴⁾。以下、この2点について報告する。

2.1 日本語力（レベル判定テスト）

はじめに、2003年4月、つまり学部留学生の入学時の日本語力について報告する。今回使用したレベル判定テストは、本センターが実施している全学講習コース、いわゆる補講のプレイスメントテストを使用した⁽⁵⁾。

テストは日本語IA、B、Cの初回に実施し、受験者は、合計53名である⁽⁶⁾。テストの結果は以下の通りである。

表1 4月のレベル判定テストの結果

表内の数字は人、()内は%、小数点二位以下四捨五入

レベル	(1) 私費留学生	(2) 国費または政府派遣留学生	合計人数
F	10 (18.8)	0 (0.0)	10 (18.9)
E	23 (43.4)	6 (11.3)	29 (54.7)
D	5 (9.4)	8 (15.1)	13 (24.5)
C	0 (0.0)	1 (1.9)	1 (1.9)
合計	38 (71.7)	15 (28.3)	53 (100.0)

レベル判定は、A～Fの6段階あり、大まかにAとBが初級、CとDは中級、E以上は上級ととらえる。学部留学生を対象とした日本語I,IIは、Fレベルを前提として授業を行っているが、Eレベルであれば、単位取得という動機があることから、なんとか授業内容を把握し修了を目指すことができるとして、受講の機会を与えることにした。

今回の結果では、Eレベルに満たない、つまりC、Dレベルの学部留学生が14名いた。C、Dレベルは中級レベルであるから、漢字1000字、語彙6000語の習得を目指し、できるだけまとまった時間、四技能を総合的に学習することが望まれる段階にある。日本語I,IIは、週1コマの独立した科目であるから、レベルだけでなく、学習形態からも、これらの学部留学生には適していないと考えられる。現行の体制はC,Dレベルの学部留学生は、日本語科目の単位取得がままならないという事態を生んでおり、授業担当者は対応に苦慮してきた。

(1) は合計38名のうち、C、Dレベルに判定された留学生が占める割合は13.2%にとどまるが、(2) は合計15名のうち、60%がC、Dレベルに判定されている。(1) と (2) どでテストから見られる力 (主に文法力) の傾向の違いは明らかである。

2.2 口頭運用能力 (インタビュー)

口頭運用能力はOPI (Oral Proficiency Interview) ⁽⁷⁾ を基本としたインタビュー ⁽⁸⁾ に則して判定された。OPI判定によるレベル基準の概略を表2に示す。

表2 OPIにおける評価基準表

レベル	下位分類	機能・タスク	場面・内容	テキストの型
超級	なし	裏づけのある意見・仮説が述べられる。話題が抽象的に論じられる。非常に高度な正確さを維持できる。	フォーマル、インフォーマルな状況で、抽象的・専門的な話題を幅広くこなせる。	複段落
上級	上中下	詳細な叙述・描写ができる。予期せぬ複雑な状況にも効果的に対応・処理できる。	個人的・一般的な関心事について、具体的な事実関係の話題が扱える。	段落
中級	上中下	意味のある陳述、質問内容を、模倣ではなく、創造できる。サバイバルなタスクが遂行できる。	日常的な場面で身近な話題が扱える。	文
初級	上中下	最も一般的な事柄に対する単純な質問に、暗記した語句や単語の羅列によって、最小限の意味を伝えられる。	ごく限られた、非常に身近な場面において挨拶を行う。	語・句

OPIガイドラインをもとに作成

学部では、指導教官とのやりとり、事務的な手続き、授業などで、ある話題に関する説明が要求される場面は多く、まとまった話をする能力は重要な要素であり、少なくとも上級レベル以上の口頭運用能力が要求される。さらにゼミや授業で口頭発表などが多く要求される3年次までに、抽象的な語彙などを使って文をまとめて説明したり、裏づけのある意見などが論理的に述べられるよう、上級のサブレベルを上げるような超級に向けての口頭運用能力の強化が必要であろう⁽⁹⁾。

しかしながら、文部科学省または自国の政府奨学金を受け、学部入学前に日本語予備教育を受けた留学生11名のうち、入学時に上級に達しているとみられる学生はおらず、全員中級であることが明らかとなった。以下に、インタビューの結果を示す。

表3 学部入学前予備教育を受けて入学した学部留学生のOPI判定

レベル		前期 (人)
超 級		0
上 級		0
中 級	上	5
	中	3
	下	3
初 級		0

実際の発話資料から、以下、具体的にみていくこととする。

[T : 教師・ S : 留学生]

(A 中の上)

T : 日本にきて一番驚いたことはなんですか

S : たぶん、あー、日本の技術が進んでいるので、はじめてきて、あー電車の音、あー、人の働くこととかに驚きました、たとえば、老人は早く歩きます、そしてはじめて電車の音をきいて、私は飛行機と思いました、すごく声が大きかったからちょっとびっくりした、また、日本人の若者たちです、あの私このまえに、日本人は礼儀正しくと、あー、若者を見て、特に恋人どおし、よくみられるように電車とか、どこでも、スーパー、たとえば電車の中で、若者たちが、近く、近づいて座って、愛を語り合うことにびっくりしました、私はアジアの国からきたんだから、ちょっとびっくりしました

T : (国の名前) では?

S : そんなこと見られないんです

T : あーそうですか、今はどうですか、一年たって

S : だいたい慣れました、普通のことになった、それは日本のスタイル、あー日本人は働きすぎだから、だんだんわかるようになりました

「中の上」は今回の一番上のレベルであるが、まだ個別的な話題を並べただけの羅列的な談話構成であり、文と文のつながりが唐突であったり、不適切なことから、聞き手の推測がかなり必要であり、外国人の発話に不慣れな聞き手にとっては理解しにくいものであると言える。また、「のだ」の使い方や、基本的な語彙の不適切さも挙げられる。学部レベルで要求される裏づけのある意見や仮説を論じたり、詳細な叙述や説明を行うために必要な段落、

複段落を構成するにはまだ困難なレベルであると言えよう。

(B 中の下)

T: どこにすんでいますか

S: ぐんみょうじですんでいます

T: 弘明寺の駅から寮までどうやっていきますか

S: 歩いて3分くらいです

T: 道を教えてもらえますか

S: 駅をでて、ひだりくちの、おか、おか、、しょうがつっこうかな、そこへでて、道をまっすぐ、まっすぐ、あと、一番目の右がわまがります、それで留学生会館あります、

(C 中の下)

T: 日本は少し寒いですか、(国名)と比べて

S: (国名)とくらべて、さむくて、、、、くらべて、、、、うーん、日本人はやさしいとおもう、日本は、日本人は、、、、時間を守ることが、、、、守る時間が、時間を守った人です、

一方、下のレベルである「中級の下」では、まとまった発話は見られず、助詞の誤用や脱落、接続詞・テンス・アスペクトが不適切であること、また発音の不明瞭さ、流暢さに欠けることなどの問題を抱えていることから、日常生活にも支障があると考えられ、学部における勉学についてはかなりの困難が予測される。入学時の口頭運用能力では、日本語に対してかなりの時間と努力を注がなければ、学部要求レベルには達することは難しく、非常に深刻な現状であることが明らかである。

上述した口頭運用能力の問題点、現状を踏まえ、入学前の予備教育機関とも今後連携して対応策を検討していく必要がある。また、今後どのように口頭運用能力が推移していくのか、継続してみていく必要があると考えている。

2.3 学習相談と学習計画

以上の結果を受け、特にC、Dレベルと判定された学部留学生については、日本語学習指導を個別に、必要に応じて複数回実施し(4月及び10月、10月は特に必要と認められた者のみに対し行った)、可能な限り、1年次前期に、日本語科目を履修すること、また、全学日本語講習(初級から中上級の日本

語科目が週あたり2003.10期は36コマ開設されている)を紹介し、単位として認定されないが、目的やレベルにあった科目を履修することを強く勧めた。しかし、結果としては全学日本語講習を週4コマ受講したものが1名、1コマ受講したものが2名いるだけであった。C、Dレベルの学部留学生の立場から考えると、教養教育科目の日本語科目、その他の教養教育科目を受講するのが手一杯で、プラス α で単位として認められない授業を自主的に受講するには余裕がなさすぎたというのが現実のようである。

3. 問題点の整理—日本語科目を履修しない理由—

今回日本語学習指導を行った中級者の中には、単独科目の数コマの履修ではなく、6コマ以上からなる総合コースで集中的に学ぶ必要のある者が含まれていることがわかった。履修要目によると、日本語科目は4年間で8単位を上限として(学部によっては、6単位まで、あるいは、4単位以上というところもある)外国語科目に代えることができるというものであり、1年次にその半分ないしは半分以上を履修する者が多い。しかし、今回の学習指導で、特に集中的な学習が必要な中級者の中に、前期1コマのみで、後期は履修しない者もいるということが判明した。これでは、中級者には1年次に全学日本語講習も含め、なるべく多くの日本語履修をうながそうという、日本語学習指導の目的が果たされたとはいえない。日本語を履修しない事情に関しては、履修登録日までに複数回にわたり面談する中で、次のような返答があった。以下簡条書きにする。

1. 必修科目が多く、時間割上、1年次に年間1コマしか履修できない。
2. 学部の講義やテキストの内容を理解し課題を遂行することで精一杯で、日本語学習の時間がない。
3. 後期に日本語科目と英語科目が時間割上重なった場合、年明けに実施される英語統一試験の準備に有利であるという理由で、英語科目を優先させ、日本語科目を履修しない。
4. 日本語科目と他の外国語科目が時間割上重なった場合、日本人学生が大半を占める外国語科目を履修したほうがいい成績が期待できるという理由で、英語や他の外国語科目、例えば、母語に近い言語(例:スペイン語を母語とする学習者がフランス語を選択する、英語を公用語とする学習者が英語を選択する)を履修する。

5. 前期の講義では、講義内容の理解はともかく、満足できる成績を取得できた。いい成績をとるために、特に日本語が必要だという差し迫った必要性を感じていない。

以上をまとめると、日本語科目を履修しない理由は、次のようになろう。

1. カリキュラム上不可能であるため
2. 日本語学習より優先すべきものがあるため
 - ① 学部の授業を優先するため
 - ② よりよい成績をとることを優先するため例：他の外国語を履修するほうが有利であるから
3. 学部の授業の成績と日本語力の密接な関係はないと認識しているため

1.に関しては、日本語科目が履修しやすい時間帯を設定するために、数年前にアンケートを実施したことがあったが、一学部内でも共通の時間帯を確保するのは困難であるということが判明し、その後は、長期休暇中の全学日本語講習の受講を勧めるなど、他の学習機会を紹介してきた。しかし、一時帰国などの理由で、中級者の受講は、期待をはるかに下回るものであった⁽¹⁰⁾。時間帯に関しては、今後も検討が必要であろう。

2.の①に関しては、日本人学生と同一カリキュラムで科目を履修することを感じる困難さは、留学生の中でも、中級者の場合は一層深刻であるということであろう。留年等、進学に支障のある学生の中に、日本語力が不足している学生が含まれているという事実も報告されている⁽¹¹⁾。その中には、日本語科目が時間割上履修不可能で、日本語力が伸びず、一般科目についていけなくなった結果、再履修となり、履修科目が増えたことにより、日本語科目の履修が一層困難になるという悪循環があるという。

また、2.の②から、GPA制度が導入され⁽¹²⁾、卒業要件に単位数だけでなく、成績の内容も加わった現在、成績へのこだわりは強まると予測されるが、成績を優先するあまり、中級者が日本語科目履修を避けるという事実があるとすれば、今後詳細な調査が必要であろう。

3.のケースは、講義内容や課題遂行に、高度な日本語力が必要とされない場合、あるいは、単位が取得しやすいとされている科目を選択している場合も含まれよう。

中級者が2.3のような理由で、日本語をあえて履修しない例を生じさせないためには、日本語科目を1年次の必修にするなど、規定が必要となろう。

4. 留学生センターで行う過渡的措置

留学生は、日本語力が不十分であっても、1年次から日本人学生と同一カリキュラムで授業を受け、課題をこなしていかなければならない。執筆者が、内々におこなったアンケートでは、留学生は1年次前期に、平均8.5本のレポートを作成し、授業に必要な教科書や参考書として、8.9冊の書籍を購入しているということがわかった⁽¹³⁾。こうした現実からもこれらの課題をこなすに十分な日本語力の養成が急務であることは明らかである。中級レベルで入学してきた者に留学生センターができることとして、次の二策が考えられる。

1. 学期中、学部の授業と平行して、6コマ程度の連続性のある補講を行う。
ただし、これは教養科目の単位にはならない。
2. 教養教育科目「日本語Ⅰ・Ⅱ」は、上級者を対象としているが、あらたに中級者を対象とするクラスを増設する。

しかし、1.に関しては、中級者と判定された者が共通の時間帯を確保することは不可能に等しいということ、また、他の科目の履修条件は変わらず、単位として認定されない科目を余分に履修することは留学生にはさらなる厳しい条件を課すことになるため、この方法は困難であろう。単位として認定されない科目の受講をうながすために行った今回の学習指導が、目的を十分に達成しえなかったことから、補講の受講を促すには困難が予測される。

2.は、1年次前期に「日本語Ⅰ中級」を前期6コマ開設し、時間割上可能な範囲で受講し、後期以降は、従来の教養科目「日本語Ⅰ・Ⅱ」を受講するというものである。実施にあたっては、履修要綱の大きな枠組みの変更やカリキュラム再編は不要であり、より現実的である。しかし、この方法は、履修科目が単位化されるという点で1.の問題点の一つは解決しているが、6コマの日本語科目の連続履修が時間割上可能な者は必ずしも多くないと予測されるという点、また、中級日本語を、従来の上級日本語と同様に教養科目として扱っていいのかという点、つまり、教養科目としての日本語科目の位置づけに関し、今後再考が必要となろう。

以上のような議論を踏まえ、2.の措置、つまり、1年次前期に「日本語Ⅰ中級」の6コマの増設が必要と考え、留学生センターが全学教育部会において

これを提案し、数ヶ月の協議を経て、最終的に承認され、2004年度から実施されることになった。しかし、これは、あくまでも過渡的な対応であり、この段階では、特に後者、つまり、中級日本語を中心とした履修で教養科目としての日本語科目の履修を終えたとして十分であるかという点に関しては、現段階では、中級者に、「日本語Ⅰ中級」履修後も、可能な範囲で、日本語科目を受講するよう、センター、及び、各学部の双方において強調するなど、多方面からの指導体制が必要である。しかし、これまでの経緯からわかるように、学部留学生の受け入れ部局でないセンターが単独で行うことには限界がある。効果をあげるためには、今後の各学部の方針によるところが大きいだらう。

5. 将来に向けての提案

最近の留学生受け入れ体制の変化の一つに、2002年度より日本留学試験が実施されるなど、選抜方法が変わったことがあげられる。単純に比較できないとはいえ、日本語力については今までより低いレベルの学生の入学が可能になったという見方が強い⁽¹⁴⁾。これに加えて、文部省の新しい方針として、渡日前入学許可が可能になった。本学では、現在のところ実施していないが、渡日前入学許可が実施された場合、現在の留学生の平均的日本語力が低下しつつある状況はさらに深刻になる。今後さらに、日本語力の低い学生の入学を受け入れる可能性があるとするれば、学部教育の質を維持するためには、入学後の早期対策を全学的にたてる必要があると考え、次の点を緊急課題として提案したい。

1. 日本語力判定テストの義務化について

2003年度は、日本語科目の受講者に対し同テストを行った。特に日本語学習指導が必要と思われる中級者への周知は、各部局留学生教育専門教官及び、留学生センター運営委員の先生方の協力を得て実施した。本年度は、周知が行き届き、1年生全員が日本語科目を受講したので、結果的に53名全員に実施できた。尚、入学時の日本語力判定テストに関しては、義務化する要望が全学教育部会においてだされたが、全学的な協議の結果によっては、センターで実施することになる。

2. 中級者の外国語科目の規定について

中級者は、外国語科目の1科目として日本語を選択し、また、カリキュラム上可能なら、1年次前期にまとめて履修するのが好ましいと判断される。2003年度は、1年次に、日本語を前期・後期あわせて1科目しか履修しない中級者もいた。中級者が、1年次に日本語Ⅰを1科目しか受講せず、2年次により難易度の高い日本語Ⅱを受講しても、成果は望めない。

3. 日本語科目履修年次とコマ数の規定について

履修規定では、3学部において、1年次に日本語Ⅰを、2年次以降卒業までに日本語Ⅱを、外国語科目の単位として代替できるというものであり、日本語科目を履修する年次に縛りはない（経営学部においては規定がある）。極端な例ではあるが、中級者が1.2年次に履修しないで、4年次に日本語Ⅰを2科目、日本語Ⅱを6科目履修するというケースも認められることになる。レベルによっては、日本語Ⅰに重きをおいた履修が望ましいということもある。また、他大学では、日本語科目は1年次のみの必修としたり、文系・理系で必要単位数が異なるところもある。日本語科目の内容に関して言えば、学部授業を受けるために必要な技能を養成する1年生向けの日本語と、就職を控えた4年生に求められている日本語は異なる。今後、履修年次やコマ数等、全学的方針にあわせ、日本語科目の内容をセンターで議論していかなければならない。

4. 中級者の日本語履修科目数について

前節で示した、1年次前期に作成したレポート数、購入した教科書数を見る限り、中級者に対し、入学直後に日本語力を上達させることは急務である。今後、「日本語Ⅰ中級」を前期に6コマ履修したとしても教養教育の日本語科目を履修したとは言えない。中級科目履修後は、上級者と同様の科目数をこなすのが望ましい。補講としての受講が望めないのと同じように、必要単位以上の履修をしないだろうということも考慮に入れるなら、1年生前期に限り、日本語科目を他の教養科目と振り替えることを可能にするなど、中級者の日本語科目履修体制の整備が必要となろう。

以上のことは、全学教育部会においても、一部提案を試みた。日本語科目についての履修規定は、学部留学生の受け入れ部局全体の協議のもとに、全学的方針が決定されることが望まれる。留学生センターは、その結果を受け、

科目を調整していくが、議論の過程において、具体的提案を行うなど積極的に協力していきたい。

6. おわりに

各学部では、学部留学生の占める割合は少なく、その存在はきわめて見えにくいものと思われる。今回学習指導を実施した者は、すでに渡日前に選抜を受け、1~2年間の日本語予備教育を受けてきており、その多くは日本語のクラスで最前列で熱心に授業を受けている。しかし、今回の学習指導を通じ、入学後、日本人と同一のカリキュラムの中で、試験や進学に強い不安を感じるなど、抱えている問題の深刻さが、あらためて浮き彫りになった。また、GPAが導入され、単位だけでなく、成績が卒業要件に加えられた現在、成績に対する不安感も強いように感じた。GPAに関して言えば、日本語力との相関も指摘されており⁽¹⁵⁾、留学生は、一定のレベルの日本語力を維持していなければ、専門に関する潜在能力が生かしきれないという報告がある。この結果を踏まえるなら、留学生センターは、今後も新入留学生の日本語力の動向とニーズを的確に把握し、それに対応したカリキュラム構築に向けて、研究と実践を重ねなければならない。

尚、全学教育部会において、教養教育講義要目の「4. 外国人留学生のための授業科目」における日本語科目の各学部の扱いについて、検討された。2004年度以降に行われる再審議の際に、本稿が参考にされれば幸いである。

(付記)

日本語力判定テストは、センターの専任教官が実施した。本稿で報告した調査及び提案は、留学生センター日本語教育部門のFD活動の一部である。執筆は、2章2節は奥野が、その他の部分は小川・丸山が共同で担当した。

「日本語Ⅰ中級」科目の増設にあたり、全学教育部会の協力をいただいた。

注

- (1) 2003年5月現在、本学に在籍する留学生の総数は852名、そのうち学部留学生は212名である。
- (2) 日本語Ⅰは1年次に、日本語Ⅱは2-4年次に履修する科目で、各々前期に3科

目、後期に3科目開講される。

- (3) 日本語能力試験の1級と2級との違いは例えば漢字、語彙の出題範囲から見るができる。『日本語能力試験 出題基準 改訂版』(2002)によると、「2級の漢字は原則として漢字表に掲げる1023字」で「1級の漢字は原則として第1水準漢字1926字、第2水準漢字110字」である。また「2級の語彙は原則として語彙表の5035字を含む6000語および「あいさつ語等表現」のなかの当該項目」で「1級の語彙は原則として語彙表の8009字を含む10000語および「あいさつ語等表現」のなかの当該項目」である。
- (4) 日本語学習指導は本学以外で学部入学前予備教育を受けて入学した留学生と、その他C、Dレベルと判定された留学生全員を対象に実施した。口頭運用を測るためのインタビューは本学以外で学部入学前予備教育を受けて入学した留学生全員に実施した。
- (5) テストそのものは現在開発途上にあり、公開できないが、一学期のべ約900名(横浜国立大学留学生センター 2003a:44-45)の受講生を対象にレベル判定を行っている実績から、これを使用することにした。テストには聴解と筆記の2種類あるが、所要時間は合計で約30分と短い。授業活動への影響を抑えることが可能な点も、このテストを採用する理由となった。
- (6) テストは一人1回受験し、複数回受験することのないよう配慮した。
- (7) OPIとはACTFL (American Council on the Teaching of Foreign Languages)の言語能力基準に基づいて行われる口頭運用能力を評価するための方法であり、機能的にどのくらい話す力があるかを総合的に評価するための、標準化された手順である。レベルは、初級・中級・上級・超級の主要レベルと超級以外の3つのレベルをサブレベル(上・中・下)に分けた10段階のレベルに判定される。詳しくは参考文献を参照されたい。
- (8) OPIを短縮化し、各レベルを測定できるよう典型的な質問を組み込んだ15分程度のインタビューを行った。
- (9) 日本語Ⅰでは、上級から超級に向けての口頭運用能力を強化する授業を設けているが、上記の学生のうち受講者は3名のみ(「中の中」1名、「中の上」2名)である。
- (10) 2003年度に関しては、学期中に1ないし2コマしか、履修できなかった学

生に声をかけたが一人も参加申し込みはなかった。

- (11) 川井謙一教授（工学部）からご教示いただいた。
- (12) Grade Point Average の略
- (13) 31名の学生に対して行った。学部によってばらつきがあり、これは4学部
の平均値である。
- (14) 本学の日本留学試験の結果の扱いは部局により異なる。以下参照。
http://www.ynu.ac.jp/ynu/exam/senbatu16_8.pdf
- (15) 水本光美（2003：58）

参考文献

- 国際交流基金・財団法人日本国際教育協会編著（2002）『日本語能力試験出
題基準 【改訂版】』凡人社
- 水本光美（2003）「日本語能力試験2級レベルの学部留学生が抱える問題点
—日本語能力と成績との相関性が示すもの—」『シンポジウム 留学一年
目の教育のあり方—科学教育の視点から—【2003年3月14日開催】講演集』
東京外国語大学留学生日本語教育センター
- 日本国際教育協会（2003）「日本留学試験 よくある質問」（2003/12/7現在）
http://www.aiej.or.jp/examination/efjuafis_question.html#5-3
- 牧野成一（監修）（1999）『ACTFL OPI試験官養成用マニュアル』OPI日本語
研究会翻訳プロジェクトチーム翻訳 アルク
- 牧野成一他（2001）『ACTFL OPI入門—日本語学習者の「話す力を客観的に
測る」—』アルク
- 丸山千歌（2003）「日本留学試験実施前の学部留学生の日本語の課題」『横浜
国立大学留学生センター』10号 横浜国立大学留学生センター
- 横浜国立大学留学生センター（2003a）『横浜国立大学留学生センター自己点
検報告書 1998-2002年』横浜国立大学留学生センター
- 横浜国立大学留学生センター（2003b）『日韓共同理工系学部留学生事業の課
題と今後の展開』横浜国立大学留学生センター